

発達の観点からみた
女性の親との心理的距離と性格特性の関係 (3)
- 「依存」か「服従」か、因果関係からの検討 -

三 田 英 二

**Relation between psychological distance
and Personality trait with women's parents
from the viewpoint concerning development(3).**

MITA Eiji

・目的

前研究（三田、2012）において、親との心理的な距離と性格特性の関係を相関関係から検討した。前研究では、全般的に、親への「依存」よりも、親への「服従」の方が、性格特性との関連は強かった。また、親への「依存」・「服従」に対する自覚が、自己形成上重要なことを示した。

前研究は、相関関係から検討を行った。本研究では、因果関係から前研究の再検討を行う。同一データを用いるため、結果に大きな差異は出ることはないが、念のため、因果関係から前研究の結果を再検討する。

本研究では、矢田部・ギルフォード性格検査（以下、YG 検査）の 12 の下位因子を目的変数とし、独立意識尺度（加藤・高木、1980）を因子分析した結果（三田、2003）得られた「親への依存」因子と「親への服従」因子を説明変数として、重回帰分析を行い検討していく。つまり、前述のように、前研究の結果を補足するために行うものである。

本研究での目的は、以下の 2 点である。

親に対する「依存」・「服従」が性格特性にどのように影響を与えているか、因果関係から、再度、検討すること。

上記に関連し、親との心理的な距離が、近すぎても、遠すぎても、内的準拠枠である性格特性と有意な関係が見られないことについても、再度、確認すること。

前研究（三田、2012）では、青年期後期段階で、親からの心理的独立性が高い場合（「低依存・低服従」群）でも、心理的依存性が高い場合（「高依存・高服従」群）でも、「親への依存」因子と YG 検査下位因子と有意な相関関係が見られなかった。この結果を受け、心理的独立性が高い場合と、心理的依存性が高い場合では、異なる解釈が必要と考えた。そして、これを前提として考察を行った結果、この前提は支持される結果が得られた。「親への服従」因子との関係においても同様のことが考えられた。すなわち、親からの心理的独立性が高い場合は、「親への依存」因子・「親への服従」因子は、内的準拠枠である性格特性（YG 検査下位因子）から独立し、関連しなくなり、結果的に、有意な相関を示さない。心理的依存性が高い場合は、幼少期での行動原理であった、親への「依存」・「服従」が青年期後期段階まで継続し、生得的な行動原理として、内的準拠枠となる性格特性よりも、優先する準拠枠として、有意な相関関係を示さなくなる。そして、成人期前期段階に移行する中（あるいは、移行後に）、親への「依存」・「服従」を自覚することで、親からの心理的自立を図っていくと考えている。

本研究では、上述のことを、再度、確認するため、上記、を、因果関係から検討することを目的としている。

・方法

調査対象者、調査用具は、前研究（三田、2008、2012）と同一であるが、参考までに記載する。

1．調査対象者

青年期後期段階の女性の調査対象者（以下、青年期後期群）90 名（平均年齢 19.18 歳

SD=.76, range18-21)。成人期前期段階の女性の調査対象者（以下、成人期前期群）80名（平均年齢 25.98 歳, SD=2.09, range22-30）とした。なお、欠損値があるデータは今回の分析から除外しているため、下記（Table 1）に示す各群の人数と一致はしていない。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率 60%)。

2. 調査用具

(1) 親との心理的な距離の測定およびグループ分け

親との心理的な距離の測定についても、前研究（三田、2008、2012）と同一であるが、参考までに記載する。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36）、第2因子「親への依存」（項目 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33）、第3因子「時間的展望の拡散」（項目 3, 13, 14）、第4因子「反抗期心理」（項目 28, 30, 31, 37）、第5因子「自信の欠如による親への服従（以下「親への服従」と略記）」（項目 17, 18, 26, 29, 34）の5因子が抽出されている（付録1参照）。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件により、回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4, 3, 2, 1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からは、この点に関する質問は全くなかった（成人期前期群では郵送による調査のため、この点に関しては不明である）。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」因子得点の理論上の range は、8点から40点となる。「親への服従」因子得点の理論上の range は、5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群 24点、成人期前期群 25点、「親への服従」因子で、青年期後期群 12点、成人期前期群 11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存群・低依存群」、「高服従群・低服従群」に分け、分析用に更にそれをクロスさせ、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群に分けた。その内訳を Table 1 に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	20	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	18	高依存・低服従群	15
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	27	低依存・低服従群	29
合計	83	合計	77

(2) 性格特性の測定

市販されている矢田部ギルフォード性格検査 (YG 検査) を用いた。YG 検査は、12 の性格特性 (下位因子、詳細は、付録 2 を参照されたい) を測定するよう作成されている。下位因子得点の理論上の range は、0 点 ~ 20 点である。得点が高い方が、その性格特性が強いことになる。

なお、性格特性 (下位因子) の解釈に当たっては、辻岡 (2000) を参照している。

・結果

各群ごと、「親への依存」因子と「親への服従」因子を説明変数とし、YG 検査の 12 下位因子を目的変数として、重回帰分析を行った。その結果を、「高依存・高服従」群を Table 2 に、「高依存・低服従」群を Table 3 に、「低依存・高服従」群を Table 4 に、「低依存・低服従」群を Table 5 に示した。

Table 2 標準偏回帰係数 (「高依存・高服従」群)

青年期前期	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
親への依存	.00	-.12	.17	.13	-.04	.13	.24	.05	-.30	-.30	-.08	.25
親への服従	-.47	.35	-.27	-.27	-.25	-.26	-.67***	.08	-.06	.44	-.04	.17
重相関係数	.48	.38	.31	.29	.25	.27	.69***	.09	.31	.50	.09	.32
決定係数	.23	.15	.09	.08	.06	.08	.47	.01	.10	.25	.01	.10
成人期前期												
親への依存	.15	.46**	.11	.19	.19	-.06	.25	.18	.39	-.03	.23	.12
親への服従	.25	.17	.46**	.18	.18	.19	-.22	-.52	-.57***	-.41	-.75****	-.44
重相関係数	.34	.55**	.51**	.31	.31	.18	.26	.48	.55**	.42	.70****	.41
決定係数	.11	.30	.26	.10	.10	.03	.07	.23	.30	.18	.49	.17

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

「高依存・高服従」群の重相関係数が有意であったのは、青年期後期群で、目的変数 Ag (攻撃性) 因子 ($F(2,17)=7.55, p<.01$) で、説明変数「親への服従」因子の標準偏回帰変数が有意であった ($t=-3.77, p<.005$)。成人期前期群では、C (気分の変化) 因子 ($F(2,21)=4.56, p<.05$)、I (劣等感) 因子 ($F(2,21)=3.73, p<.05$)、R (のんき) 因子 ($F(2,21)=4.55, p<.05$)、そして、A (服従的 - 支配的) 因子 ($F(2,21)=9.96, p<.005$) の重相関係数が有意であった。標準偏回帰変数は、目的変数 C (気分の変化) 因子で、説明変数「親への依存」因子が 5% レベル ($t=2.34$)、目的変数 I (劣等感) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 5% レベル ($t=2.27$)、目的変数 R (のんき) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 1% レベル ($t=-2.87$) で、そして、目的変数 A (服従的 - 支配的) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 0.1% レベルで、それぞれ有意であった (Table 2)。

青年期後期群では、親に服従することが原因となり、攻撃的ではなくなることを示している。また、成人期前期群では、親に依存していることが原因となり、気分の変動が大きくなり、親に服従していることが原因となり、劣等感が強まり、のんきではいられなくなり、服従的になることを示している。

Table 3 標準偏回帰係数（「高依存・低服従」群）

青年期前期	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
親への依存	.06	-.15	.34	.08	-.15	-.03	-.07	-.17	-.29	-.23	-.04	-.39
親への服従	.38	.39	.17	.45	.40	.67 ^{***}	.66 ^{****}	.13	-.17	-.28	-.26	-.37
重相関係数	.38	.42	.37	.45	.43	.68 ^{**}	.67 ^{**}	.22	.33	.35	.26	.53
決定係数	.14	.18	.14	.21	.19	.46	.45	.05	.11	.12	.07	.28
成人期前期												
親への依存	.36	-.20	.15	.13	.58 ^{**}	.50	-.18	.40	-.34	-.09	-.29	-.61 ^{**}
親への服従	.33	.50	.70 ^{**}	.53	.44	.43	-.12	.74 ^{**}	-.33	.54	-.46	-.43
重相関係数	.39	.61	.66 ^{**}	.50	.59	.53	.18	.62	.38	.51	.45	.61
決定係数	.15	.37	.44	.26	.35	.28	.03	.39	.15	.26	.20	.37

** . . . p<.05

*** . . . p<.01

**** . . . p<.005

***** . . . p<.001

「高依存・低服従」群（Table 3）において、青年期後期群で、重相関係数が有意であったのは、目的変数 Co（協調的 - 非協調的）因子（ $F(2,15)=6.33, p<.05$ ）と目的変数 Ag（攻撃性）因子（ $F(2,15)=6.05, p<.05$ ）であった。標準偏回帰変数は、目的変数 Co（協調的 - 非協調的）因子で、説明変数「親への服従」因子（ $t=3.54, p<.005$ ）、目的変数 Ag（攻撃性）因子で、説明変数「親への服従」因子（ $t=3.44, p<.005$ ）が有意であった。成人期前期群で重相関係数が有意であったのは、目的変数 I（劣等感）因子（ $F(2,12)=4.72, p<.05$ ）だけで、標準偏回帰変数は、説明変数「親への服従」因子（ $t=3.04, p<.05$ ）が有意であった。

青年期後期群では、親に服従することが原因となり、協調的な態度が強まり、同時に、攻撃性も高まることを示している。成人期前期群では、親に服従することが原因となり、劣等感が強まることを示している。

Table 4 標準偏回帰係数（「低依存・高服従」群）

青年期前期	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
親への依存	-.55**	-.29	-.34	-.33	-.47	-.40	.12	.11	-.22	.47	-.27	-.03
親への服従	.09	.25	.30	.24	.07	.30	.08	.13	-.01	.21	-.11	-.01
重相関係数	.57**	.43	.51	.46	.50	.55	.13	.15	.22	.46	.26	.03
決定係数	.33	.19	.26	.21	.25	.31	.02	.02	.05	.21	.07	.00
成人期前期												
親への依存	-.25	-.03	-.39	-.22	-.77**	-.49	.26	.03	.23	-.09	.51	.38
親への服従	.57	.50	.41	.50	.05	-.02	.03	-.66	-.49	-.41	-.01	-.45
重相関係数	.73	.51	.69	.64	.80**	.46	.25	.67	.64	.37	.51	.72
決定係数	.54	.26	.48	.41	.64	.21	.06	.45	.41	.13	.26	.52

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

「低依存・高服従」群（Table 4）においては、青年期後期群で、目的変数 D（抑うつ性）因子（ $F(2,15)=3.72, p<.05$ ）、成人期前期群で、目的変数 O（客観的 - 主観的）因子（ $F(2,6)=5.28, p<.05$ ）の重相関係数が、それぞれ有意であった。青年期後期群の目的変数 D（抑うつ性）因子では、説明変数「親への依存」因子の標準偏回帰変数が有意であった（ $t=-2.50, p<.05$ ）。成人期前期群の目的変数 O（客観的 - 主観的）因子では、説明変数「親への依存」因子の標準偏回帰変数が有意であった（ $t=-2.68, p<.05$ ）。

青年期後期群では、親に依存することが原因となり、抑うつ性が低下することを示し、成人期前期群では、親に依存することが原因となり、客観的になることを示している。

Table 5 標準偏回帰係数（「低依存・低服従」群）

青年期前期	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
親への依存	-.06	-.23	-.22	-.14	-.11	-.43	-.15	.17	.30	.02	-.18	-.22
親への服従	.12	-.01	.41	.33	.14	.16	-.35	.07	-.52	-.24	-.19	-.30
重相関係数	.11	.23	.36	.29	.13	.39	.43	.21	.47	.24	.32	.44
決定係数	.01	.05	.13	.09	.02	.15	.19	.04	.22	.06	.10	.20
成人期前期												
親への依存	.03	.05	-.01	.15	.19	.06	.03	.07	.06	-.30	.11	.06
親への服従	-.05	-.01	.07	-.16	-.22	-.15	-.20	-.30	-.12	.27	-.18	-.12
重相関係数	.05	.04	.09	.16	.22	.13	.19	.28	.11	.31	.17	.11
決定係数	.00	.00	.01	.03	.05	.02	.03	.08	.01	.09	.03	.01

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

「低依存・低服従」群では、青年期後期群、成人期前期群ともに、有意な重相関係数を示した目的変数はなかった（Table 5）。

このことは、青年期後期群も成人期前期群も、親への「依存」・「服従」は、性格特性に影響を与えていないことを示している。

・考察

1. 「高依存・高服従」群

(1) 青年期後期群

「高依存・高服従」群の青年期後期群で、目的変数 Ag (攻撃性) 因子において、説明変数「親への服従」因子の標準偏回帰変数が有意であった (Table 2)。このことは、親に「服従」することで、攻撃性を抑制していることを示している。すなわち、親に「服従」することは、反発の原因とはならず、心理的に安定する要因となっていることを示した。

相関分析 (三田、2012) では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子と相関関係はなく、「親への服従」因子との間に、D (抑うつ性) 因子と Ag (攻撃性) 因子と有意な負の相関を示した。本研究で行った因果関係からは、「親への服従」因子は、Ag (攻撃性) 因子だけの有意な予測因子となっている。

本研究においても、説明変数「親への依存」因子とは、有意な因果関係は見られなかった。前研究 (三田、2012) の相関分析においても、有意な相関関係はなかった。

これらのことから、この群における親への「依存」は、生得的なものということが、より明確になったと考える。また、親への「服従」が、反発を招く要因ではなく、心理的な安定をもたらす予測因子となったことから、この群は、まさに親へ「高依存・高服従」することで、心理的な安定を図っている群と考えられる。そのため、親へ「高依存・高服従」することが内的準拠枠となっていると推定される。

(2) 成人期前期群

成人期前期群では、C (気分の変化) 因子、I (劣等感) 因子、R (のんき) 因子、そして、A (服従的 - 支配的) 因子の重相関係数が有意であった。標準偏回帰変数は、目的変数 C (気分の変化) 因子で、説明変数「親への依存」因子が 5% レベル、目的変数 I (劣等感) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 5% レベル、目的変数 R (のんき) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 1% レベルで、そして、目的変数 A (服従的 - 支配的) 因子で、説明変数「親への服従」因子が 0.1% レベルで、それぞれ有意であった (Table 2)。

相関分析においても、「親への依存」因子と YG 検査 C (気分の変化) 因子に有意な正の相関関係があり、「親への服従」因子とは、本研究で得られた因果関係 (I (劣等感) 因子、R (のんき) 因子、A (服従的 - 支配的) 因子) の他、S (社会的内向 - 外向) 因子と有意な負の相関関係が見られている。因果関係からも、概ね、同様の結果が得られた。

「親への服従」因子が、「劣等感」、「のんきではいられない」、「服従している」ことへの予測因子となっている。つまり、親に「服従」することは、劣等感を呼び起こし、のんびりしてはいられず、まさに、服従していることを自覚し、その結果としてか、親に「依存」していることが心理的な不安定さの原因となっていることを示していると考えられる。

青年期後期段階では、親に「高依存・高服従」することで、心理的な安定を図っていたところから、成人期前期段階になると、前研究 (三田、2012) で指摘したとおり、発達段階として、親への「高依存・高服従」は、もはや社会的に許容されないと自覚した状態と推定される。前研究での結果を、更に、明確にした結果と考えられる。

2. 「高依存・低服従」群

(1) 青年期後期群

「高依存・低服従」群 (Table 3) において、青年期後期群で、重相関係数が有意であったのは、目的変数 Co (協調的 - 非協調的) 因子と目的変数 Ag (攻撃性) 因子であった。標準偏回帰変数は、目的変数 Co (協調的 - 非協調的) 因子で、説明変数「親への服従」因子、目的変数 Ag (攻撃性) 因子で、説明変数「親への服従」因子が有意であった。「親への依存」因子と YG 検査下位因子との因果関係はみられなかった。

「高依存・高服従」群の青年期後期群では、目的変数 Ag (攻撃性) 因子は、説明変数「親への服従」の標準偏回帰変数は、負の因果関係を示したが、「高依存・低服従」群の青年期後期群では、逆の正の因果関係を示した。

青年期後期段階での「高依存・高服従」群では、「親への服従」因子が心理的安定の予測因子となっているのに対し、「高依存・低服従」群では、逆に、「劣等感」を強める予測因子となっている。しかし、もともと「低服従」群である。親に「服従」はしたくないと思っていると推測される。「親への服従」因子が、目的変数 Co (協調的 - 非協調的) 因子の予測因子となっていることから、青年期後期段階での「高依存・低服従」群の Ag (劣等感) 因子の解釈は、親が高圧的な態度で接すれば、親の指示には従うが、そのことに「苛立ち」を感じていると解釈した方が、妥当なものと思われる。

親を頼る (依存する) のは、当然の権利だが、親の指示には従いたくない、ということが青年期後期段階での「高依存・低服従」群の特徴と考えられる。

また、この群は、「高依存」群でもある。「親への依存」因子と YG 検査下位因子と因果関係が見られないことから、親への「依存」は、生得的な状態を継続しているものと考えられる。しかし、親への「服従」は、十分自覚できているため、「服従」することに「苛立ち」を感じていると思われる。

(2) 成人期前期群

成人期前期群で重相関係数が有意であったのは、目的変数 I (劣等感) 因子だけで、標準偏回帰変数は、説明変数「親への服従」因子) が有意であった。これは、親に「服従」することが原因となって、劣等感を強めていることを示している。

相関分析 (三田、2012) においては、気分が動揺する (C (気分の変化) 因子)、劣等感に苛まれる (I (劣等感) 因子)、神経質になる (N (神経質) 因子)、活動性が低下する (G (活動性) 因子) といった、自信が低下した状態と「親への服従」因子とが関連している。「親への服従」因子は、もともと、「自信の欠如による親への服従」を略記したものである。前研究では、成人期前期段階になると、心理的に不安定なときには、外的準拠枠としての親の存在を認識することを示していると考えた。

本研究においては、I (劣等感) 因子だけが「親への服従」と因果関係を持った。前研究の結果を踏まえると、単に、親に「服従」することが「苛立ち」の原因とは考えにくく、親から年齢相応な自立をしていないことに対する「劣等感」(世間に顔向けできない) と考えた方が良いと思われる。

3. 「低依存・高服従」群

(1) 青年期後期群

「低依存・高服従」群 (Table 4) においては、青年期後期群で、目的変数 D (抑うつ性) 因子で説明変数「親への依存」因子の標準偏回帰変数が有意であった。このことは、青年期後期群では、「親への依存」因子が、抑うつ性を押さえるための予測因子となっている。また、説明変数「親への服従」因子と YG 検査下位因子とは、因果関係は見られなかった。親に「服従」することが、性格特性に影響を与えていないことを意味していると考えられる。

当初、この群は、親の高圧的な態度に「服従」はするが、決して頼ろうとはしない(「依存」しない) という群と推測していたが、前研究の結果から、この群は、親との親和性を保つために、親に「服従」はする(親の指示に従う)が、親に頼らず、自立を目指すタイプと推定した。

親に「服従」することは、生得的な行動となっており、親に「依存」はしないようにはしているが、親との親和性が高いため、親に「依存」することは、心理的な安定を図るために「依存」はするが、何か、遠慮しながら「依存」しているような印象さえある。

(2) 成人期前期群

成人期前期群で、目的変数 O (客観的 - 主観的) 因子の重相関係数が有意で、説明変数「親への依存」因子の標準偏回帰変数が有意であった。また、青年期後期群同様、「親への服従」因子との因果関係は見られなかった。

成人期前期群では、「親への依存」因子が、客観的になることの予測因子となっている。冷静に「依存」している様子がうかがわれる。Fairbairn, W.R.D. (1952/1995) が指摘した「成熟した依存関係」(訳書: p.90 など) を示しているものかもしれない。

4. 「低依存・低服従」群

「低依存・低服従」群では、青年期後期群、成人期前期群ともに、有意な重相関係数を示した目的変数はなかった (Table 5)。青年期後期群・成人期前期群ともに、親への「依存」・「服従」と因果関係はなかったことを示した。

このことは、青年期後期群も成人期前期群も、親から心理的に自立し、親との関係が、内的準拠枠である性格特性に影響しないことを示す結果と考えられる。

5. 総括的討論

前研究 (三田、2012) と同一データを使用しているため、当然のことであるが、全般的には、親への「依存」よりも、親への「服従」の方が、性格特性に影響を与えていることを示している。

しかし、群別に見れば、研究目的とも関連するが、親への「依存」が高い群(「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群)において、説明変数「親への依存」因子とは、青年期後期群で因果関係はなく、成人期前期群でも「高依存・高服従」群で一ヶ所因果関

係が見られただけで、それ以外は、因果関係はなかった。

「高依存」群では、説明変数「親への依存」因子と YG 検査下位因子との因果関係が見られず、親への「服従」が高い群（「低依存・高服従」群）では、説明変数「親への服従」因子と YG 検査下位因子との因果関係が見られなかった。

これらのことから、親への「依存」・「服従」が性格特性にどのような影響を与えるかは、親に心理的に「依存」しているのか、「服従」しているのかという、親との心理的な関係の違いによって異なると考えられる。すなわち、無意識的に親に「依存」している場合（生得的な状態）は、親への「依存」は、性格特性よりも、上位にある準拠枠となり、無意識的に親に「服従」している場合（生得的な状態）も、親への「服従」は、性格特性よりも、上位にある準拠枠として機能すつため、性格特性に影響を与えないということが、より明確に示されたと考える。ただし、この場合の「服従」は、前述の通り、親の高圧的な態度に嫌々ながら従っている、という「服従」関係ではなく、親との親和性が高いための健全な「服従」関係となっていることに注意しなければならない。

繰り返しになるが、特に注目したいのは、「低依存・高服従」群である。この一連の研究を始めた当初（三田、2008）は、この群は、親の高圧的な態度に「服従」はするが、決して「依存」はせずに、自立を図る群、親との親和性が低い群、と考えていた。しかし、前研究（三田、2012）において、親との親和性を図るために、親には従う（「服従」する）が、「依存」はせず、自立を目指す群と推測した。本研究において、このことが、更に、明確になったと考える。生得的に親に「服従」しているため、説明変数「親への服従」因子と目的変数 YG 検査各下位因子と因果関係はなく、説明変数「親への依存」因子と因果関係が見られた YG 検査下位因子が、D（抑うつ性）因子（青年期後期群）と O（客観的・主観的）因子（成人期前期群）で（Table 4）、否定的な因果関係ではなく、肯定的な因果関係であった。このような親子関係は、前述した、「成熟した依存関係」（Fairbairn, W.R.D., 1952/1995）を示すものではないだろうか。男性を調査対象としたときに、この「低依存・高服従」群は、どのような特徴を示すのか、興味あるところである。

なお、本研究は、女性を対象とした調査を基に考察しているものである。上記考察は、男性との比較を行ってはず、女性の自己形成の特徴であるとするには、更なる検討が必要だと考えている。

<引用・参考文献>

- ・ Fairbairn, R 1952 Psychoanalytic studies of the personality. 山口泰司（訳）1995 人格の精神分析 講談社学術文庫
- ・ 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- ・ 三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達, 青年心理学研究, 15, 1-15.
- ・ 三田英二 2008 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 21, 37-48.
- ・ 三田英二 2012 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性の関係（2）

- 「依存」か「服従」か、相関関係からの検討 - , 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 26-W-1, 1-20.
 ・辻岡美延 2000 新性格検査法 - YG 性格検査 応用・研究手引き - 日本心理テスト研究所株式会社

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）
 （三田、2003 を一部改変）

		共通性
6. 人の意見もよく聞かすが、最終的には自分で決断できる。	.740 -.014 -.031 .036 -.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712 .046 .016 .294 -.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699 .008 -.257 -.077 .038	.562
36. どうしたらよいか、自分で決まることが多い。	-.661 .139 .276 .278 .275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625 -.125 .026 -.135 -.059	.429
35. 他人の意見や指示に、つい引き込まれてしまう。	-.585 .049 .043 .203 .237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583 .227 -.345 .115 .108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570 .190 .222 -.111 .262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519 .026 .186 .120 .216	.366
22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭ご浮かぶ。	-.035 .831 .051 .002 .059	.698
20. 親といふだけで何となく安心できる。	-.060 .795 .148 -.067 .021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014 .786 .014 .030 .018	.620
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014 .783 .026 -.056 .057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141 .714 .149 .010 -.025	.553
25. 何かする時は、親にまがましてもらいたい。	-.049 .653 -.078 .260 .312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気がない。	-.143 -.645 .048 .259 .160	.531
27. 親に何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073 .543 -.086 .256 .382	.519
14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015 .062 .857 .028 .126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194 -.005 .758 .150 -.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324 -.121 -.687 -.023 -.159	.618
31. 両親に反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067 .177 .064 .698 -.180	.560
30. 親や先生のいうことはたとえ正しくても反対したくなる。	-.010 -.030 .063 .691 -.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113 -.325 .110 .575 -.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290 .113 -.047 .531 .066	.385

18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまう、やすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決まできないときは、親の意見に従うようにしている。	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひなめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、制限されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひなめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	.850	
	.850	.876	.809	.619	.680	

付録2 YG 検査の下位因子

記号	解釈基準
D	抑うつ性
C	気分の変化
I	劣等感
N	神経質
O	客観的 - 主観的
Co	協調的 - 非協調的
Ag	攻撃性
G	活動性
R	のんき
T	思考的内向 - 外向
A	服従的 - 支配的
S	社会的内向 - 外向

(2013年4月18日 受理)